

2 図画工作科

小学校図画工作科における方策

「カマキリと遊んだよ」

「あつめて ならべて」

(第1学年)

(1) 教科の目標や内容とのかかわりと研究の視点

ア 図画工作科の基本的な学習の在り方

図画工作科においては、まず児童自らが、学習活動を通してつくりだす喜びを味わえることが具体的な目標として重視されている。そのような学習活動において、個性を生かした多様で創造的な表現活動が展開され、造形的な創造活動の基礎的な能力を育成することができ、更に高い美的な価値に向かう感情、即ち豊かな情操を育成することができるのである。

そのためには、授業における学習活動だけではなく、日常のあらゆる場面での豊かな体験を通して、それぞれの児童の中で造形的な創造活動の基盤となるような感性や想像力が活発に働き、思いやよさが自由に広がっていることが大変重要である。

児童は、自分の思いを表現したいという人間の誰でもが持ち続けている根源的な欲求に基づき、自分らしさを発揮して表現活動に取り組むことにより、その欲求を満足させ、表現の喜びを実感し味わうことができるのである。そうした学習活動においては心と体は一体となって働き、造形的な創造活動の基礎的な能力が身に付くとともに、人間としての豊かな心と心身の調和のとれた発達が実現できるのである。

一方、平成14年度からの学習指導要領では、教科の主たる目標の実現を図る上から、6年間を見通し、低・中・高学年をそれぞれ2学年ずつ目標だけでなく内容も含めてまとめて示すことにより、学校や児童の実態に応じて2年間を見通した柔軟な指導ができるようになっている。本研究における実践事例を検証する場合もこの趣旨を踏まえて検証・考察することとする。

イ 低学年における図画工作科の学習活動の特色

低学年児童の発達特性を踏まえた図画工作科における学習活動については、個々の児童の特性による差異はあるものの、例えば第1学年及び第2学年の内容A表現の(2)「感じたことや想像したことなどを絵や立体に表したり、つくりたいものをつくったりする」を踏まえて考えるならば、一般的には次のように考えられる。

(7) 表現欲求の持続性と表現活動

表現活動は人間本来の根源的な表現欲求に基づくものであり、この時期の児童の特性から、活動を通して具体化される作品そのものは、あくまでも結果であることを十分に認識しておかねばならない。児童が無心に、楽しく表現活動に取り組んでいる様子は、どのような題材であれ、図画工作科における教科指導として目指すべき基本的な学習の姿であり、一人一人の児童の中に、表現してみたいと言う強い欲求が具体的にしっかりと存在することが重要である。そのためにも、前もって、表現したいおおよその目的・目当てをもち、自分の思いに向かって表現活動する場合においても、また心身が一体となって材料などに働きかけ、自ら造形活動を創造する造形遊びにおいても、児童一人一人の中に表現活動の

過程において思いが一層深まったり、関心や意欲が次々と沸き上がることが必要である。

低学年の児童にとっては、はじめの思いが必ずしもそれほど確かなものではない場合も多く、表現活動の過程において次々と深まり展開していくものであるという、図画工作科における発達特性にも留意しなければならない。学習活動のある時点で、常に児童の中で表現欲求が再確認・再生産されながら持続していくことにより表現活動そのものが豊かになると言うことである。

(イ) 表現活動における自己中心性と集中力

授業においては、様々な児童の様子が見受けられる。1時間を通してほぼ自分の世界に入り込み、集中力を発揮して活動に没頭できる者、時間の途中で表現が活動を始める前の思いと違ってきていることに気付き、自分の表現方法に疑問を感じて手を止めて困った様子を見せる者、自分の活動と表現を、何度も手を止めながら一つ一つ確認するようにして進めていく者、最初から自信なさそうに、何度も他の児童の表現をのぞき込んだりしている者、指導者に自分の表現の在り方を逐一確認しようとする者など、低学年の児童の学習活動の様子は本当に様々である。

ただし、基本的に共通することは、児童にとって表現活動が自己表現そのものであり、他者からのよりよい評価を得ることを目標にしているのではなく、常に自己中心的で、いかに自分の思いをその思い通りに表現できるかが最も大切なことなのである。集中して活動できる児童ほど自分の思いを大切にし、自分の表現の方法を最も好ましいものと考えているのである。

(ウ) 表現過程における新しい表現技法の気付きや技術面での工夫

児童は活動を進めながら、表現そのものの工夫を試みることが多い。その場合、児童にとっては自己の思いをどのように具体化できるかが中心課題であり、けっして見映えのよさや技術的なうまさなどを求めているものではない。その気付きと工夫の試みの原点はあくまでも自分自身の中にあり、こう表したいという強い表現欲求が表現技能の形成のエネルギーとなる。

新しい技法の発見や技術的な工夫は、どのようにして始まるのかについて、もう少し具体的に考えてみたい。一人の児童が、自己の表現そのものに対して常に満足感を感じているとするならば、その児童にとっては、新しい題材に対する表現欲求は強いものの、どの題材においても特に新しい技法や技術に挑戦する必要はないことになる。この時期の児童の表現活動が自己中心的であることから、自分の表現活動の過程や結果において違和感や不満を感じた時、はじめてその努力が必要であると感ずるのである。

その際、指導者が適切な助言を与えることや他の児童の表現から気付くことなども多い。この時期の児童にとっては、自分がこれはぴったりだ、このように自分も表現してみたいと強く思った時点において、助言を受けたり、他者の表現を取り入れることになったとしても、それは決して模倣ではなく、その児童にとっては、十分に独自の表現活動そのものとなっているものとしていると判断すべきであり、児童の様子からも自分で気付き、独力で新しいことを獲得したとの満足感を読みとることが多いのである。

ウ 研究主題と低学年における図画工作科の授業との関連

図画工作科の学習活動における低学年児童の状況を踏まえ、研究主題と図画工作科の授業との関連を整理する。

(7) 学習集団としての学級とその図画工作科の授業

低学年の授業においては、高学年に比べれると、あらゆる点で個人中心の活動となるのであるが、その中で学級という集団で学ぶことの果たす役割はどのようなものかを整理することが大切である。第一には、児童一人一人の多様な思いに基づく学習活動であったとしても、より好ましい学習環境として、学級がどのように構成できているかは、個々の学習活動の在り方を考える上で大きな意味をもっている。とりわけ低学年の児童にとって、自分を伸び伸びと表現できる環境の中にいるかどうかは、自分の思いをどれだけ強くもち、表現欲求がどのように高まっているかどうかと同様に重要な要素である。第二には、積極的に刺激を得たり、新たな気付きをしながら、表現活動を豊かに展開する場であり、一人一人の学習活動そのものが互いに強い影響力・関係性をもつ場である。

(イ) 表現活動における集中力や持続力と自己コントロール力

低学年の児童にとっては、持続して表現活動に取り組むことは決して容易なことではない。はじめに一定の目的や主題をもっていたとしても、それを高学年の児童のように表現活動の最後まで変わらずもち続けられるのではなく、思いそのものも表現活動とともに変容しながらすすむものであるという発達特性から、自らの思いを深め、豊かに広げながら、表現活動への集中力や持続力をどのように持ち続けることができるか、その具体的な方法等について自己コントロール力の視点からとらえることができる。

(ウ) 鑑賞の指導の重視と自己肯定感

鑑賞活動については、表現活動と表裏一体となる大切な領域であり、見ることや触れることを通して作品などの美しさやよさに関心をもったり、感じ方や見方を深めたりして、感覚や感性を磨き高めることをねらいとしている。

低学年では、主に自分たちが描いたりした作品や、いろいろな身近な材料そのものが主な鑑賞の対象となり、それらについて話をしながら見せる、話を聞きながら見るようになる。自分の思いを話すことで自分のよさに気付くことをはじめ自己認識が深まるとともに、他者理解と共感的相互理解が進み、他者からの賞賛などを得るなど、自己肯定感が実感できる有意義な機会となる。

(2) 題材名と題材設定の理由 1

ア 題材名「カマキリと遊んだよ」 (第1学年)

イ 題材設定の理由

生活科の学習の際、公園周辺でつかまえたカマキリを教室で飼育し、本授業に向けてじっくり観察しながら昼休みなどに教室で遊ぶこととした。必ずしもかわいらしい昆虫とは言えないカマキリではあるが、時間をかけて接する中で様々なカマキリの生態に気付き、児童一人一人に興味や関心を十分にはぐくむことができると考える。

自然な形で豊かに想像力を働かせ、カマキリを描きたくなる心情を膨らませることができた後、「カマキリと遊んだよ」という題材を提示し、絵に表すこととした。

1年生の素直な感性で十分ふれあいながら、観察力と想像力を発揮させるとともに、個々の思いに沿って自由に伸び伸びと描かせ、一人一人に表現することの楽しさや喜びを実感させることを通して、表現活動への意欲や豊かな表現力を育てることとしたい。

図画工作科においては、一人一人の表現活動が学習活動の中心となるが、本題材では、鑑賞活動を重視し、表現活動の途中と最後に十分な時間を設定することとした。自分の思

いや表現について発表することを通して、自己認識を一層深め、表現への意欲を膨らませることができる。又他者の対象への思いや表現の工夫を互いに理解することによって共感的理解に基づく人間関係を築くことができる。と考える。

本題材においては、鑑賞活動を中心に、自己コントロール力や自己肯定感とのかかわりの視点から児童の変容を把握し、検証、考察することとしたい。

ウ 題材の目標

- (ア) カマキリを育てたり、遊んだことを思い出し、楽しかったこと、おもしろいと思ったこと、びっくりしたこと、怖かったこと、発見したことなどから自分の表現したいことを考えようとする。(造形への関心・意欲・態度)
- (イ) 自分の表現したい主題を決定し、想像力を働かして自由に思いを膨らませ、具体的な表現内容について考える。(発想や構想の能力)
- (ウ) クレヨンやパスなどを中心に、その使い方を工夫して、自分の表したいことを思いのままに楽しく表現する。(創造的な技能)
- (エ) 自分の表現や他の児童の表現を鑑賞することを通して、色や形、表し方などの違いやおもしろさに気付き、見ることに関心をもつ。(鑑賞の能力)

エ 題材の指導計画 (p.55.56参照)

(3) 題材名と題材設定の理由 2

ア 題材名「あつめて ならべて」 (第1学年)

イ 題材設定の理由

低学年における造形遊びは、身近な素材を取扱い、自分の感性で素材のもつ造形的なおもしろさに気付き、それらを並べたり組み合わせたりして造形的な活動を自由に楽しむ活動の過程において造形的な創造活動の基礎となる能力を養うことが大きなねらいとなっている。

本題材では、特に並べることに重点を置き、気に入った素材を並べることからはじめながら、素材を独自の感性で鋭くとらえること、並べながら造形的なリズムや色彩感覚を楽しむこと、偶然発見したおもしろい見立て遊びをして楽しむことなど、自由に五感を働かせながら楽しみ、楽しみながら次々と活動過程をつくりだし、造形的な感性を豊かに養うことをねらいとする。

ウ 題材の目標

- (ア) 形や色彩、触感など素材の特性に興味や関心を持ち、五感を働かせて積極的にかかわろうとする。(造形への関心・意欲・態度)
- (イ) 並べる活動を楽しみながら、造形的なおもしろさに気付いたり、素材の組合せなど思い付いたことを試みながら、新しいおもしろさを創造したりする。(発想や構想の能力)
- (ウ) 使用用具に関心を持ち、その使用方法を自分なりに工夫する。(創造的な技能)
- (エ) 自己の感性や創造性などについて他の児童との違いを理解し、そのおもしろさや独自性を尊重する。(鑑賞の能力)

エ 題材の指導計画 (p.57参照)

工 題材指導計画

「カマキリと遊んだよ」

時 間	指導過程と指導内容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価	記コントロールをはぐくむ視点 自己肯定感をはぐくむ視点
	<p>事前の活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カマキリの飼育を通して、その特徴の理解を図るとともに、親しみを感じて遊んだりするなど、様々な想像力を豊かに発揮させる。 	<p>カマキリと遊ぶ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つかまえてきたカマキリを飼育する。 ・遊びながら観察し、かまきりの特徴などを感覚的につかむ。 ・親しみをもちながら、カマキリと遊ぶことを想像する。 <p>カマキリとさよならをする</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・よく観察することを通して、カマキリの形やしぐさの特徴をつかむとともに、課外の時間に教室の中で実際にカマキリと遊ぶなど、十分な時間を確保し、現実を越えてカマキリと楽しく遊ぶことなどにも自由に想像をめぐらすことができるよう配慮する。 ・カマキリの形にとらわれすぎぬよう、又別れを通して一層各児童の中でカマキリへの思いが膨らむよう配慮する。 		
<p>第1週 2時間 20分</p>	<p>導入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童が温めていたカマキリへ思いを絵に表すことを提示し、文章にまとめ、発表することで表現への意欲の高揚を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・題材から自分のカマキリへの思いをまとめる。 ・カマキリの特徴や自分の描きたいカマキリと楽しく遊ぶ様子を発表し、話し合う。 ・他の児童の描きたいことを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・カマキリの特徴をつかみ、どの児童も自分なりのイメージに自信をもてるよう留意する。 ・カマキリを擬人化して一緒に遊ぶ様子を自由に具体的に想像できるよう留意する。 ・発表の中で一人一人が絵にしたいと思っている具体的な場面をとらえ、問いかけたりほめたりしながら表現内容を児童と共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・かまきりの特徴や自分の想像力をはたらかせ、描きたいことをまとめるとともに、自分の言葉で発表できている。(造形への関心・意欲・態度)(発想や構想の能力) 	<p>自分の思いを自分らしい表現に結びつくようまとめる。</p> <p>まとめを通して自分の思いを深める。</p>
<p>55分</p>	<p>製作(1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの思いを確認しながら一人一人の表現活動を指導・援助する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・描きたいことが明確になったら用紙を選び、描きたいところから製作を始める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・どの児童も安心して自分の描きたいことを思いのままに描いてよいという雰囲気を作る。 ・一人一人がカマキリとの空想の世界に無理なく入り込んでいることを確認する。 ・机間指導では一人一人に声をかけ、次の鑑賞における発表がスムーズに行くよう留意する。 ・用紙は白画用紙や色画用紙の他、厚紙などから自由に選べるようにする。 ・クレヨン、パスによる表現効果のおもしろさに気付かせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・思いを大切に伝えたいことが表せるよう構図やものの形を考えたり、自分の思う色彩となるようクレヨンやパスを工夫して使っている。(創造的な技能) 	<p>自分の思い通りに表現できるよう努力する。</p> <p>自分の表現方法を確認する。</p>

時 間	指導過程と指導内容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価	自己肯定感をはぐくむ視点 自己肯定感をはぐくむ視点
15分	鑑賞(1) ・自分の思いと製作の状況を確認しながら発表できるように指導・助言する。	製作途中の絵を鑑賞する ・自分の描きたいことを絵を見せながら発表し、他の児童の発表を聞いてその思いを理解する。	・製作がスムーズに進んでいない状況の児童には十分配慮する。 ・他者理解が進むよう、共感的に聞く態度を十分指導する。 ・次週の製作につながるよう自己確認させる。	・自分の思いと表現の状況について理解し、表現意欲を高める。(鑑賞の能力)	説明することを通して自分の表現に自信をもつ。 説明を聞き他者理解を深める。
第2週 2時間 55分	製作(2) ・意欲を喚起しながら、一層想像力が広がり、一人一人の豊かな表現となるよう指導・助言する。	・先週の授業を思い出し、自分の思いやねらいを確かめ製作を進める。 ・途中で他の児童の邪魔をしないように鑑賞し、おもしろいところやよいと思うところを発見する。	・机間指導を中心に声をかけ、児童の絵に共鳴し、よさを認める。よい表現を紹介し、ほめ、励ます。 ・なかなか表現活動が進まない児童には、再度想像力を働かせ空想の世界に入り込めるまで話を引き出すように配慮する。	・表現活動を進めながら、自分の思いを確かめたり、新たに深め、広げたりすることができる。(発想や構想の能力) ・発見、気付き、工夫して自分の表現の方法や技法を創造できる。(創造的な技能)	自分の思いを表現しようと努力する。 自分の表現のよさに気付き自信をもつ。
25分	鑑賞(2) ・自己認識と他者理解を深めさせながら、表現活動の楽しさを実感し、表現への関心や意欲をもつよう指導する。	・自分の作品を見せながら、表したかったこと、工夫したこと、うまく表せたことなどについて話したり、他の児童の作品を見たり説明を聞いたりして、それぞれのよさについて理解する。	・作品を黒板に掲示し、一人一人十分時間をとり、自分の作品について自由に説明させる。 ・他の児童の作品について、その表現のよさを理解し共有できるよう、児童の説明をうまく補足することにも留意する。 ・説明の後、必ず何人かに感想を発表させ共感的理解を図る。	・表したかったことを発表できている。(鑑賞の能力) ・友達の作品のよさを見つけられている。(鑑賞の能力)	達成感を味わい、他者の賞賛等から自己肯定感を深める。
10分	まとめ ・表現活動の楽しさを思い起こさせながら表現への意欲を喚起する。	・楽しかった活動を振り返り、自分自身で表現のよさに自信をもつ。	・工夫や努力について取り上げながら、一人一人が自分の活動を振り返れるよう配慮する。		

エ 題材指導計画

「あつめて ならべて」

時間	指導過程と指導内容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価	記コントロールをはぐくむ視点 自己肯定感をはぐくむ視点
20分	導入 ・直接手にとって楽しむことを通して素材のもつ様々な特徴に気付くよう指導する。	・集めた素材をよく観察し、自分なりにその造形的なおもしろさに気付く。	・自然物や人工物など、児童にとって日頃よく目にする身近な素材を集める。 ・形、色、触感など五感を働かせて独自の感性でとらえることができるよう、十分時間を与える。	・素材の特性から造形的なおもしろさを発見し、他の素材にも積極的にかかわろうとする。 (造形への関心・意欲・態度)	自分の感性を働かせ、ものとかかわろうとする。
50分	製作 ・集めた素材のもつおもしろさを生かして、並べたり重ねたりしてできる造形的なおもしろさを理解し、自分なりに造形活動の過程を作り上げられるよう指導・助言する。	・並べながら色の変化や造形的リズム感などを楽しむ。 ・組合せを試しながら新しいおもしろさを発見する。 ・接着や組合せなど用具を工夫して自分の思い通りに表現する。	・造形的なおもしろさそのものが理解しにくかったり、気付きにくい児童への助言を本人が感性で理解できるまで焦らずにいいに行う。 ・単調な作業にならないよう、様々な素材を取り扱うことを助言する。 ・うまくいかないことがあってもあきらめず挑戦することを指導する。	・並べることを楽しみながら造形的なおもしろさに気付く。(創造的な技能) ・試しながら次々と新しい活動の過程を自ら作っている。(発想・構想の能力) ・自分なりにうまく用具を使うことを工夫する。 (創造的な技能)	自分なりのとらえ方や並べ方の工夫を通して自分の発想などのよさに気付く。 粘り強く自分の方法を試しながら製作する。
20分	鑑賞 ・楽しんだことや気付いたこと、工夫したことなどを説明することを通して造形活動のおもしろさを実感させる。	・自分のとらえたおもしろさをどのように生かそうとしたかについて説明する。	・多様な感覚を全員が同じように理解することはできないが、自分の言葉でしっかりと説明するよう助言する。 ・なるほどと共感できるおもしろいとらえ方には、態度や言葉でその旨を示すよう促す。	・自分の五感で素材のおもしろさをとらえることができ、他の児童の感じ方に対して理解しようとする。 (鑑賞の能力)	他者の説明を聞きながら感じ方を理解する。 他者の承認を得ながら自分のよさに自信を深める。

(4) 指導上の工夫 - 実践事例と研究主題との関連 -

図画工作科における教科目標等を踏まえ、取り扱った二つの題材について本研究主題から、次のようにとらえることとする。

題材「カマキリとあそんだよ」は、目標の(1)及び(3)、内容のA表現の(2)のア及びB鑑賞の(1)のアにかかわる題材である。

第1学年及び第2学年の目標

- (1) 表したいこと、つくりたいものを自分の表現方法でつくりだす喜びを味わうようにする。
- (3) かいたり、つくったりしたものなどを見ることに興味をもち、その楽しさを味わうようにする。

第1学年及び第2学年の内容

A 表現

- (2) 感じたことや想像したことなどを絵や立体に表したり、つくりたいものをつくったりするようにする。

ア 表したいことを進んで見付け、好きな色を選んだり、いろいろな形をつくって楽しんだり、つくり方を考えるなどしながら思いのままに表すこと。

B 鑑賞

- (1) かいたりつくったりしたものを見ることに興味をもつようにする。
ア 自分たちの作品の形や色、表し方の面白さなどに気付くなどして、見ることに興味をもつようにすること。

題材「あつめて ならべて」は、目標の(2)、内容のA表現の(1)のア及びB鑑賞の(1)のイにかかわる題材である。

第1学年及び第2学年の目標

- (2) 材料をもとにした造形活動を楽しみ、豊かな発想をするなどして、体全体の感覚や技能などを働かせるようにする。

第1学年及び第2学年の内容

A 表現

- (1) 材料をもとにして、楽しい造形活動をするようにする。

ア 身近な自然や人工の材料の形や色などに関心をもち、体全体の感覚を働かせて、思い付いたことを楽しく表すこと。

B 鑑賞

- (1) かいたりつくったりしたものを見ることに興味をもつようにする。
イ 身近な材料に触れ、その感じについて話したり、友人の作品の表したかった気持ちを聞いたりするなどして楽しく見ること。

ア 低学年児童の発達特性を踏まえた具体的な指導上の工夫

(ア) 自由に表現活動ができること

図画工作科の学習活動においては、個々の児童の自己表現活動であることが基本的な学習の在り方であり、何よりも一人一人の児童が伸び伸びと表現活動を展開している姿を大切にしなければならない。そのためには児童の主体的な学習姿勢、表現活動への関心や態度が十分に高められていることが必要である。

題材の指導目標を明確にするとともに、個に応じた指導を中心に据え、一人一人の状況に柔軟に対応できることである。ややもすると児童のあるがままに任せた活動のみの授業や作品づくりに偏った授業等にも陥りやすい傾向があり、表現欲求を十分に醸成させることが何よりも大切にしなければならない指導上の工夫である。

(イ) 図画工作科としての授業規律

学習集団として、学級全体がどのような状況にあるかは、図画工作科における学習環境として大きな意味がある。特に低学年にあっては、伸び伸びと自由に表現できること、自分自身の思いを活動しながら深め広げていくこと、鑑賞活動において自分の思いを发表或し、他者の説明を聞いて理解することなど、学習活動の中に動と静がダイナミックに存在していることに留意しなければならない。その切り換えがスムーズにできる授業を実現することが大切であり図画工作科における授業規律の基本でもある。

イ 指導・助言の在り方と工夫

(ア) 机間指導における個に応じた指導

図画工作科の授業における指導は、机間指導等個別指導が中心となる。

個に応じた指導を的確に実践する上からは、個々の児童の表現活動や鑑賞活動における状況の理解が十分できていることが基本である。低学年の児童にあってはそれぞれの造形的な資質能力の変容がめまぐるしく起こることが多く、非常に把握しづらいが、その指導資料が正確で適切であればあるほど適切な指導・助言をすることができ、児童の主体的な学習を促すことができる。

(イ) 鑑賞活動における指導・助言

鑑賞活動は集団的な形態で行う活動であり、低学年では自己理解と他者理解を深め、見ることに興味・関心をもつよう留意しなければならない。

ウ 研究主題との関連

本研究テーマとの関係においては教科の特性等を踏まえ、次のように考えた。

(ア) 自己コントロール力とのかかわり

低学年児童の発達特性を踏まえ、表現活動の持続性を高めることや他者理解を図ろうとすることとの関連から、図画工作科の授業における自己コントロール力について考察する。

第一に、題材から自由に思いを膨らませることであり、粘り強く自分らしさを出して想像力を発揮することである。低学年の児童にとっては具体的に描き出せる表現内容に高まるまで思いを膨らませることは、必ずしも容易なことではないと考えられる。

第二に、自分の思いどおりに表現できるまで試行錯誤をする時間を与えることにより、思いを具体的に表現できたという充実感や、更にもっと描き加えたいという欲求や思いをもち続けさせることである。

第三に、他の児童の思いをしっかりと聞いて理解することや、表現された作品のよい点を理解しようとすることである。自己中心的で自分のことしかとらえることができにくい段階の児童にとって、集中して聞くことに取り組むことや、自分の思いや表現との違いを尊重しながら他者理解を深めることは難しいことである。

集中力の点からは、低学年の児童においては自分の興味や関心のあることはそれなりに持続性を発揮することがよくある。今回の実践事例では、表現活動に取り組むことにかかわって、「題材から思いを膨らませる」、「表現活動に継続して取り組む」、「他の児童の説明を聞き理解する」ことについてどのように集中力を持続することができるか、その持続性を発揮している状態が正にこの児童にとって自己をコントロールする力を発揮している状態であるととらえ、図画工作科の学習における自己コントロール力の育成につながるものととらえることとする。

(イ) 自己肯定感とのかかわり

鑑賞の活動における自己認識の深まりと自信及び他者との共感的な理解や他者からの賞賛等との関連から考察する。

第一に、自分が題材から膨らませた思いについて、その概要を簡単な文章にまとめたり、発表したりすることを通して自分で再確認し、自分の思いやそのよさに自信をもつことである。この学年の児童においては、感性の働きがストレートで、思いを直感的に表現と結びつけることが活動の基本的な姿であり、一つの思いを大事に温めることは必ずしも得意ではない。

第二に、自分の思い通りに表現が進んでいること、努力によって進んだことを確認できたことで自信をもつことである。この学年の児童においては、あれやこれやと次々に思い浮かぶことを、自分なりに納得しながら表現の中でつないでいくような過程をたどることが多い。そんな彼らの学習過程の中で、あえて手を止め、自分の思いを再度確かめながら、じっくりと表現内容や表現技能の工夫について自分のものとしてまとめ、自信をもって表現活動できることを大切にしたい。

第三に、思いや表現作品の発表を通して、他の児童から感想やよい点について評価を受け、自分の活動について更に自信を深めるとともに、所属感や達成感を味わうことである。この学年の児童は、教師や他の児童からの承認が自分の活動についての唯一の拠り所であり、次の行動へと押し出す原動力となるものである。又他の児童のよい点を発見する活動そのものが、自己との違いに気付き、自己認識を深める好機となる。

(5) 授業における児童の様子

ア 学級全体の様子

入学当初は、絵がなかなか描き出せない児童がいたり、どの児童も同じ絵になる傾向があったようであるが、学習を重ねる中で図画工作科の授業本来の自己表現の場として、ほとんどの児童にとっては自分の思いを自由に表現できる楽しい学習の場になっている。

本実践事例のそれぞれの課題における児童の様子は、日頃の指導の確かさもあり、授業における児童の反応が非常に活発で積極的であった。

特に表現活動は当然のこと鑑賞活動においても、自己中心的な傾向はしっかりとコントロールされ、低学年の鑑賞活動としてそのねらいを十分達成できていると考えられる。

特に実践事例1では、鑑賞活動を重視して取り組んだことにより2週にわたる授業となったがその集中力や持続性はとぎれることなく熱心に製作が進んだ。

イ 個々の児童の様子

一人一人の児童が、本実践事例を通してどのように変容したかについては、教科の特性や対象学年から客観的に結果を判断することは困難であった。

事例1においては、日頃はやや消極的で、持続性も弱い児童が対象を大胆にとらえて一人で集中して活動できたことや、まだまだ三次元的なもののとらえ方や表現感覚は育つ段階ではないが、カマキリの背中に乗るとか羽の後ろに隠れる等の動作を表すことを工夫する中で、重ねて描くことや半身を隠すなど立体的な表現につながるものが生まれてきたり、色へのこだわりが強まりどんどん重ね塗りが始まったりと、鑑賞活動を充実したことの効果といえる状況が見受けられた。

事例2においては、少人数の学級であるとはいえ、一人一人がほとんど違う造形のおもしろさを追求して楽しんでいることが特に印象的であった。

(6) 成果と課題

ア 成果

あらためて鑑賞活動のもつ意味とその重要性が確認できたことである。図画工作科において鑑賞活動は表現活動を支えるものであり、常に一体のものとして扱うことが重要である。さらにそのねらいや効果から、各学校の児童や地域の状況に応じて鑑賞を独立して取り扱うことを考えたい。

とりわけ本実践事例のように低学年においては鑑賞活動をどのように取り扱うべきかを具体的に年間の題材構成や指導計画を構想する中でしっかりと位置付けなければならない。

自己コントロール力については、図画工作科においては、積極的に自己を制御することを通して、向上しようとする意欲をもつことや、その意欲を高めるための努力をすることである。自己コントロール力を発揮させ、育てることは、自己表現の欲求を常に一定の高さで保ち続けるための指導方法を考えることである。

自己肯定感については、表現と鑑賞の活動全体を通して常に児童の心の中にもち続けられていなければならない感覚・感情であり、自己理解の深化と他者との共感的な相互理解を基にした他者からの賞賛や承認によってもたらされるものである。図画工作科においては鑑賞活動においてその場面をつくりだすことが大切である。

イ 課題等

題材の指導計画を構想するなかでは一定の確信をもって考察することができたが、短期間の実践事例研究となったので、具体的な授業を通してもう少し長期にわたって検証することが必要であると考えられる。